

## 第2章 児童生徒の主体性を育む教育活動

今般の新型コロナウイルス感染症対応の経験を重ね、本年度も各学校において柔軟な発想で工夫が図られた教育活動が展開されました。多くの学校において、計画的・継続的な教職員の支援により、児童生徒の自主的・自発的な活動が数多く見られます。

ここでは、児童生徒の主体性を生かした3校の取組を紹介します。

### 1 児童が中心となって工夫改善した活動

A小学校では、自治的・自主的・自立的な態度や精神を育てるために、意図的に児童が主体となる場面を設定しています。本年度は特に、あいさつの励行やコミュニケーション能力の向上による居心地の良い学級づくり・いじめのない学級づくりのための活動を充実させています。

#### (1) あいさつ運動

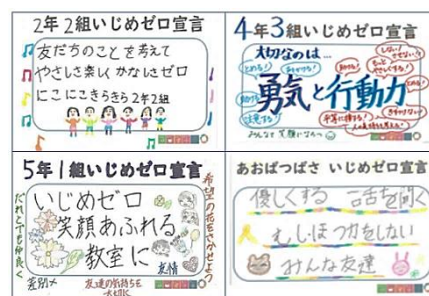
これまで週に2日、生活委員会の児童が昇降口付近で、あいさつ運動をしていましたが、児童から「もっとあいさつの輪を広げたい」という声が出てきました。そこで、一緒にあいさつ運動をしてくれる児童を募集することになり、ポスターを作って呼びかけました。今では生活委員会の児童だけでなく、低学年の児童も、「あいさつレンジャー」として進んであいさつ運動に参加しています。また、あいさつ月間では、生活委員会の児童を中心に「あいさつ名人」に関する動画を作成するとともに、全学級でその動画を視聴し、「あいさつ名人」になるために、自分たちのクラスでは何ができるか話し合いを行いました。加えて、月ごとにあいさつについての振り返りを行い、児童の中からは「あいさつをすると気持ちがすっきりする」などの意見が出て、あいさつへの意識が更に高まりました。



【生活委員とあいさつレンジャーによるあいさつ運動】

#### (2) いじめ防止の取組

毎年、いじめの未然防止のため、「いじめゼロ集会」を行っています。この集会は、世界人権デーに合わせて企画され、全校児童でいじめを許さないことを確認する機会となっています。例年、全校児童が体育館に集まり、生活委員会が問題となる寸劇を演じ、いじめについて考える時間としていました。令和2年度はコロナ禍であり、体育館に集まることができないため、どうすれば開催できるか、児童が中心となって話し合いました。その結果、例年どおり児童が寸劇の台本を作成し、実演した寸劇を録画し、その動画を各教室で視聴し、いじめの解決方法を話し合う形で開催しました。児童からは、「いじめは絶対にいけないことだということを、改めて感じた。」という感想が多数ありました。この「いじめゼロ集会」は、児童がいじめの問題について考えを深め、自分の言動を見つめ直す機会となっています。



【いじめゼロ集会後に各学級で立てたいじめゼロ宣言】

### 2 自主・自律（自立）を促し伸ばす学校経営の推進と取組

B小学校では、学校全体で児童主体の教育活動を推進し、「楽しく居がいがあり、成就感がもてる学校づくり」「自分で考えて行動できる児童の育成」に努めています。児童が自主性や当事者意識をもって学校・地域・人・物事にに関わりたくなるような教育活動を展開しています。

#### (1) 児童が主体的に学びたくなる家庭学習指導 ～「宿題なし月間（週間）」の実施～

どの児童にも一律・同等に与える宿題を見直しました。まず、自分が学びたい教科や分野、伸ばしたい力を見つめ、目標を設定し、各自の学習計画表を作成します。その期間は教師からの宿題は出さず、一律でなく自律の学びを育みます。事後に児童・保護者・教師の三者による評価を行うことで、取組の在り方や主体的に学ぶことの意義を共有しています。

## (2) 主体性の高まりを仕掛ける新たな行事 ～「全校ハイキング」「全校リレーマラソン」～

異年齢集団での「全校ハイキング」では、高学年児童が班で安全に活動するために自主的に下見をするなど主体的な活動が見られました。そこには、5月の体育的行事でのリーダーとしての経験が大いに生かされています。上学年児童が下学年児童に対し優しい声かけや丁寧に道案内をする姿が見られました。下学年児童にとって上学年児童に対して憧れや尊敬の気持ちをもつ機会にもなり、自主的・自発的行動の好循環につながっています。

「全校リレーマラソン」では、1・4年、2・5年、3・6年の児童が組むことで、4年生にもミドルリーダーとしての意識を芽生えさせ、行事の成功を目指して自発的に考えを出し合う4年生の生き生きとした姿が見られました。

そのような主体性を大切にした教育活動を展開する中で、自主的・継続的に取り組む児童が増えました。校長は、「自主・自律賞」を設け、児童のがんばりを認めています。そこには、校長の「進んでやってみよう」や「続けていこう」という意識を育ててほしいという願いが込められています。



【異学年での全校ハイキング】



【全校リレーマラソン】



【自主・自律賞 受賞の様子】

## 3 生徒自ら実行委員会を立ち上げて交流を深めた事例

C中学校では、令和元(2019)年度からパラリンピアンと継続的に交流を続け、親交を深めています。

令和元(2019)年度は、陸上の鈴木徹選手を迎えるにあたり、生徒自らオリパラクイズを校内に掲示したり、横断幕やお守りを作成したりして歓迎しました。お迎えのリハーサルや学校内のエスコートも生徒が進んで行いました。

令和2(2020)年度のオネア選手(オーストラリア・水泳)との交流では、前年度の経験を生かし、生徒がオリパラ実行委員会を立ち上げ、準備段階から企画・運営に携わりました。教職員は様々な機関と連携し、生徒が自主的に活動しやすい環境を整えることで、生徒の主体的な活動を支援しました。その支援により、オンライン交流会には生徒へのサプライズとして橋本聖子元大臣と市長が参加し、多くのメディアで取り上げられました。自分たちの取組が多くの人に紹介されることは、生徒の意欲向上につながりました。鈴木選手の2度目の来校の際には更なる工夫が図られ、校内放送「YouTube」を活用した発信が加わりました。こうした生徒が自由に発信できる場を設定することも、生徒主体の活動を活性化させることにつながりました。

そして、オリンピックイヤーである本年度には、オーストラリアのホストタウンになっている他県の2校と本市の3校で選手村にいるオネア選手に応援メッセージを届けるなど、交流の幅が広がりました。オネア選手のために、生徒たちは英語で資料を作成し、様々な学校とオネア選手とのオンライン交流会に臨みました。

このように、生徒の自主性を尊重する教職員の支援のもと、生徒の主体性が育まれています。一度得た交流の機会を自分たちで継続した質の高い交流へとつなげたことで、生徒たちは共生社会の実現を身をもって体感しています。



【鈴木徹さんとの交流会】



【オーストラリアのオネア選手との交流会】

